

7. 基礎現代文化学系

基礎現代文化学系は、科学哲学科学史専修、メディア文化学専修、現代史学専修の3つから構成されている。

科学哲学科学史専修は、その学問的基礎を哲学および科学の学説史においている。「科学とは何だろうか」という問いに、哲学と科学史の2つの観点から答えることを目指している。

メディア文化学専修は、現代におけるメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化により生み出された、国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式にかかわるさまざまな問題を考察する。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にある。

現代史学専修は、旧史学科の現代史学講座として設置され、一次史料の分析に基づく歴史学の方法論をとる。一方で、様々な国や地域の間のような影響関係を考察することなくして現代という時代を把握することは出来ないという視点に立ち、現代史を世界史として把握することを目指している。したがって、日本を含む特定の国の歴史を分析する場合にも、常に世界的な位置づけや相関関係を考察することが求められる。

基礎現代文化学系に所属した2回生は、2回生終了時まで各自の関心とする領域を見出し、目指すべき専修を定めてほしい。それぞれの専修の研究内容を知る助けとしては、現代文化学系の大学院修了者によるリレー講義形式の基礎現代文化学系ゼミナールが開講されている。2回生では基礎現代文化学系各講義、2回生向け演習(基礎演習)、ならびに一部の講読・特殊講義・演習を履修できる。講読は、系全体に開かれた科目であり、2回生から3回生の間に履修する。2回生の秋に専修希望を提出するが、専修によって収容人員を上回った場合には1・2回生の時の成績等によって選考を行う。

■ 科学哲学科学史専修

教授 伊藤 和行 科学史(近代初期を中心とした西洋科学・近世以後の日本の科学) (※追記参照)

准教授 伊勢田 哲治 科学哲学, 社会認識論, 検証理論, 科学实在論, 社会科学の哲学, 認識論, 科学技術倫理

[著書・論文] 伊藤『ガリレオー望遠鏡が発見した宇宙』(中公新書, 2013), 「ガリレオの天体観測と新しい宇宙論」(『哲学研究』, 2017)
伊勢田『認識論を社会化する』(名大出版会 2004), 同『疑似科学と科学の哲学』(名大出版会 2003), 『科学哲学の源流をたどる』(ミネルヴァ書房, 2018), 伊勢田ほか編『科学技術をよく考える』(名大出版会 2013)

現代社会が高度科学技術社会と特徴づけられるように, 科学は現代の社会のみならず文化の基底を構成しており, その理解は, 専門家のみならず, 非専門家にとっても非常に重要な課題である。しかし現代科学が高度な専門化している結果, 各分野の専門家は, 非常に細分化された研究に携わっており, そのために専門家には科学の全体像はむしろ洞察しづらくなっている。本専修では, 「科学とは何だろうか」という問いに哲学や科学史といった文系の学問の視点から答えることを目指す。

現代の科学哲学の研究対象は科学そのものと同じほど多様であるが, その中心となるのは, 「科学的説明」, 「仮説の確証」, 「科学的实在論」, 「科学の転換」といったテーマである。しかし数学の哲学, 物理学の哲学, 生物学の哲学, あるいは社会科学の哲学というように, ある程度研究分野を限定し, その分野での専門的な研究内容に即した哲学的問題を取り扱うこともできる(たとえば, 相対性理論における時間と空間の概念, 量子力学における因果性, 生物学的種概念, 階級の実在性のように)。また論理学と数学の基礎, 確率と統計の哲学, 心の哲学といった重要な分野もある。いずれのテーマを研究するにしても, そのために必要なのは, 問題把握のセンス, 論理的な分析能力と, 選んだ研究テーマに関して具体的な専門知識を掘り下げていく根気である。また科学的営みや知識を分析対象とする以上, 科学に関する具体的な知識を欠いた研究は不毛であるといえよう。

科学史研究は, 科学の様々な分野での学説史研究が一つの基本となる。そのためには, やはり学説の歴史的脈絡を的確に捉えた上で問題の論理的展開を追究する姿勢が肝要である。もちろん, 哲学史や思想史の場合と同様, 成功した理論だけでなく, それと競い合った考えにも目を配り, 十分広い文脈を考慮することが欠かせない。正統的な学説史研究と並んで, 科学的営みを歴史的・社会的な大きな文脈のなかで捉える立場もある。この立場では, 主としてアイデアの展開に着目する思想史の視点よりも, 科学の理論も他の歴史的な事象と同じような多様な要因に影響されるものと見なす視点が重要視される。ただし正統的な学説史研究をなおざりにすると, 「一時的な評論」に終わるおそれがある。また専門的な科学史研究には, 現代的な意味での「自然科学」以外の様々な学問分野にわたる, 原典および研究文献を読解する能力が必要である。

科学哲学と科学史は, 「科学とは何だろうか」という問いに答えるための両輪である。科学哲学は, 「科学的知識」をその主たる考察対象とする以上, 科学的営為に関する具体的な知識が不可欠であり, 科学史の知識なくしては砂上の楼閣に陥る恐れがあるだろう。一方科学史は, 哲学的な指針を持たなければ, 個別研究の迷宮の中に, 羅針盤を失った帆船のように迷い込んでしまうかもしれない。

近年では科学哲学・科学史は「科学技術社会論」(STS)と呼ばれる, より広い学際的分野の一部と見なされることが多くなってきた。STSでは, 社会学や心理学などの研究手法も用いられ, また研究対象も狭い意味の科学に限らず, 技術に分類されるものや, 科学と社会の接点において生じる問題なども対象となる。本専修の軸足は(特に大学院においては)あくまで科学哲学と科学史にあるものの, 学部レベルでは, STSも含めた広い意味で「科学とは何だろうか」という問いにアプローチする研究も歓迎する。

本専修の卒業論文のリストは専修ウェブサイトで公開しているので参照されたい。

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/philosophy_and_history_of_science/phs-student-gradtheses/

【追記】伊藤和行教授におかれましては令和3年7月に逝去されました。

なお, 次年度(令和4年度)の科学哲学科学史専修の学問分野・内容は上記のまま変更はありません。

■ メディア文化学専修

教授 喜多千草 コンピューティング史, 現代技術文化史, 現代文化学

准教授 松永伸司 分析美学, ゲーム研究, 現代文化学

教授(兼) ミツヨ・ワダ=マルシアーノ 映画研究, メディア研究

[著書・論文] 喜多 『インターネットの思想史』(青土社, 2003); 『起源のインターネット』(青土社, 2005); 『社会的責任を考えるコンピュータ専門家会 (Computer Professionals for Social Responsibility)』の成立と発展『史林』101巻1号(2018)

松永 「キャラクタは重なり合う」フィルカル1巻2号(2016); 『芸術の言語』(ネルソン・グッドマン著, 慶應義塾大学出版会, 2017)(共訳); 『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会, 2018)

ワダ=マルシアーノ 『「戦後」日本映画論: 1950年代を読む』(青弓社, 2012)(編著); 『<ポスト3.11>メディア言説再考』(法政大学出版局, 2019)(編著); 『No nukes: 「ポスト3・11」映画の力・アートの力』(名古屋大学出版会, 2021)

メディア文化学専修は、情報・史料学専修と二十世紀学専修が合併することにより、2018年度に発足した新しい専修です。この新専修の理念・目的を以下に紹介します。

現代はメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化が著しく、文化や情報は短時間のうちに伝播拡散し、それにより国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式が生み出されています。しかし、同時に従来の文化・国家・制度も存続しており、社会的規範や歴史認識などをめぐる新たな政治的・文化的な軋轢を生みだしています。

本専修では、こうした現代特有のメディアや文化事象にかかわるさまざまな問題を考察します。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にあります。そのため本専修では、歴史学・哲学・社会学・文学に加えて、マンガ学、ゲーム学、人文学系の情報学などの科目が用意されています。

本専修での研究テーマはジェンダー表象、視覚文化、ファッション、ゲームなど多岐に涉りますが、所属学生には各々の研究テーマに即した方法論を自ら切り拓く気概が求められます。

本専修のカリキュラムは、令和2年度より大きく変更されましたので、分属希望者は必ず専修のガイダンスに参加してください。

■ 現代史学専修

教授 小野 沢 透 アメリカ現代史・国際関係史

教授 塩 出 浩 之 日本近現代史

[著書・論文]小野沢“Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950 - 1952,” *Diplomatic History*, Vol.29, No.1, Jan, 2005; “The Search for an American Way of Nuclear Peace : The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty,” in *The Japanese Journal of American Studies*, No. 20, 2009.『幻の同盟—冷戦初期アメリカの中東政策』(上・下, 名古屋大学出版会, 2016年). 「「同時代」と歴史的時代としての「現代」」『思想』No.1149 (2020年1月, 岩波書店).
塩出『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社, 2011年).『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会, 2015年).『公論と交際の東アジア近代』(編著, 東京大学出版会, 2016年)

現代史学専修は、1966年に旧史学科の一講座として設立された、文学部の中では比較的新しい専修である。

現代史学専修は、「現代」という時代が、それ以前の時代とは異なる歴史的動態を有し、それゆえに、この時代を研究するためには、特定の国や地域を対象とする伝統的な歴史学とは異なる分析上の視点やアプローチが必要とされるという前提に立っている。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アジア・アフリカ地域が欧米を発祥とする主権国家の国際システムに取り込まれ、あるいは欧米列強の公式・非公式の支配下に入ったことで、地球上のすべての地域が相互に結びつけられ、「ひとつの世界」が出現した。近代以前にも遠隔地域間の交易や情報の伝播は見られたが、19世紀後半以降に出現した「ひとつの世界」では、ヒト・モノ・カネ・情報などの国・地域を越えた移動や伝播は恒常的なものとなり、その速度と規模は、21世紀の今日に至るまで、様々な曲折を経ながらも増大し続けている。この「ひとつの世界」は、地域を越えた人や社会の連携や相互依存を促進する一方で、新たな分断や対立をも引き起こしてきた。たとえば、地球上のほぼすべての土地が主権国家と植民地という制度のもとに分割されたことによって、それ以前の人的・経済的な結合が断ち切られる事態、あるいは対立しあう「国益」を追求するために国家が人的・物的資源を大規模に動員する事態も、逆接的ではあるが、「ひとつの世界」が出現したことの帰結であった。現代史学専修は、人類の歴史が「ひとつの世界」の世界史として展開するようになった時代を「現代」と捉え、この「現代」に生起する様々な歴史的事象を世界史的な視野から分析し考察することを目指している。

現代史学専修の研究と教育は、分析対象の当事者や同時代の観察者が残した一次史料の精確な読解を考察の出発点に据える、実証的な歴史学の方法論を取る。現代史の研究では、オーラル・ヒストリーや図像・映像をも史料として用いることがあるが、それらについても、文字史料と同様に厳密な史料批判と合理的な解釈が必要とされる。本専修の特徴は、一次史料から得られた知見を、能う限り世界史的な文脈に位置づけて考察しようとする点にある。そのためのアプローチは、無限にあると言ってよい。たとえば、国際関係史や比較史のアプローチ、あるいはトランスナショナルな視点を導入することが有効なこともあるし、ナショナリズム、ポストコロニアル、ジェンダーなど、社会・政治・思想などに関する様々な理論を援用することで複雑に絡まりあう事象を解きほぐすのが容易になることもあろう。

本専修で学ぶ学生には、史料の読解に必要とされる言語を含む、複数言語の修得が必要とされる。卒業論文のテーマは、自由に選択してよいが、研究対象の一次史料を入手できることが条件となる。(たとえば情報公開までのタイムラグゆえに必要な史料を入手できないテーマもある。)本専修は世界各地の現代史に関する多彩な特殊講義や演習を幅広く開講しているが、これらの授業だけで現代史のすべての事象や問題をカバーすることは到底できない。現代史を学ぶ学生には、他専修や他学部の授業、そして何よりも幅広い読書を通じて、世界史的な知識と視野を獲得するよう努めてほしい。